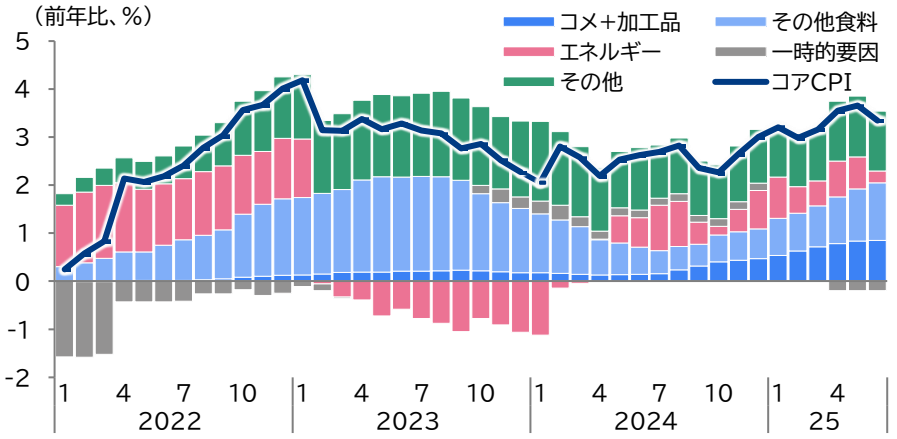
日本

消費者物価指数（2025年6月）

コアCPIの伸びは4カ月ぶり縮小、秋にかけて3%を割り込む見通し

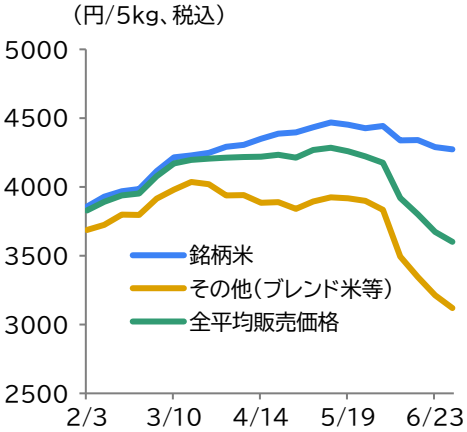
政策・経済センター
山本道也・堂本健太
03-6858-2717

1 コアCPI（生鮮食品を除く総合）



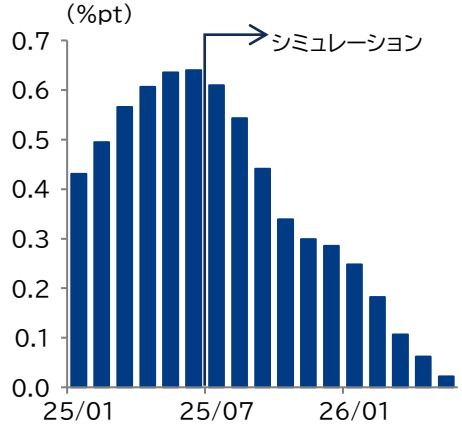
注：一時的要因は、高校授業料の無償化など政策や統計処理の影響。コメ＋加工品は、米類に加え、コメを材料とする加工品11品目を対象として算出。
出所：総務省「消費者物価指数」を基に三菱総合研究所作成

2 コメの店頭価格



注：週次ベース。直近は7月7日～7月13日の週。
出所：農林水産省「スーパーでの販売数量・価格の推移（KSP-POSデータ全国等）」を基に三菱総合研究所作成

3 現在の価格が維持された場合のコメのコアCPI前年比への寄与度



注：コメの価格が25年6月から変化しないと仮定。
出所：総務省「消費者物価指数」を基に三菱総合研究所作成

評価ポイント

今回の結果

- 25年6月の消費者物価指数（生鮮食品を除く総合、以下「コアCPI」）は、前年比+3.3%（5月同+3.7%）と4カ月ぶりに伸び率が縮小した（図表1）。
- コアCPIの伸びを項目別に見ると、「■エネルギー」（5月前年比寄与度+0.66%pt→6月同+0.24%pt）のプラス寄与が縮小した。ガソリン価格が5月下旬以降の定額補助措置により下落したほか、既往の原油価格下落を受け電気代の上昇率も縮小した。
- 一方、「食料（■+■）」（5月同+1.92%pt→6月同+2.05%pt）のプラス寄与は11カ月連続で拡大した。コメ関連品目（■）の高い伸びが続いたほか、コーヒーなどの飲料や菓子類のプラス寄与が拡大した。
- 様々な財・サービスを含む「■その他」（5月同+1.26%pt→6月同+1.25%pt）とほぼ横ばいだった。

基調判断と今後の流れ

- 消費者物価は、コメなどの食品価格高騰に加え、企業の価格転嫁が続いていることから、3%台の伸びが続いている。
- 先行きについて、①エネルギー価格低下、②コメ価格上昇の寄与剥落、を受けてコアCPIの伸び率は25年秋にかけて3%を割り込むと予想する。
- ①に関して、25年前半のエネルギー価格は前年比+6～10%程度の高い伸びを続けてきたが、年後半は既往の原油価格下落を受け伸びを縮小するとみる。8～10月は政府の電気・ガス料金支援により価格が一層押し下げられる。
- ②に関して、CPIのコメ類に相当する銘柄米の価格は6月以降緩やかな低下傾向にある（図表2）。また、農水省の作付意向調査によれば、25年産米は735万トン（対前年+56万トン）と増産を見込んでおり、コメ価格のさらなる高騰の可能性は低い。コメ価格の物価押し上げ効果は、6月時点の価格が維持されたとしても、今後縮小に転じると予想される（図表3）。

Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.